

# mahāvākya と śodhakavākya

金 沢 篤

## はじめに

今日、ヴェーダーンタ哲学と「大文章」(mahāvākya) という語の結び付きは相  
当に堅固である。だが mahāvākya と聞いて、「汝はそれなり」(tat tvam asi<sup>1)</sup>、  
「我はブラフマンなり」(ahaṃ brahmāsmi) 等のウパニシャッドの文章 (vedānta-  
vākya) を思い浮かべることは出来ても、それがどういう意味で用いられているか  
は判然としない。そうした素朴な疑問に発して筆者は先に小論<sup>2)</sup> を草し、mahā-  
vākya という術語がある種のウパニシャッドの文章に対して用いられているとい  
う歴史的事実を確認すると共に、単にヴェーダーンタ学派にとって特別に重要な  
文章であるという理由から「偉大な文章」という程の意味でその語が用いられる  
に到ったのではなく、ミーマーンサー学派において明確にされた文章理論より借  
用された術語であり、ヴェーダーンタ学派にとってもやはり「従属文」(avāntara-  
vākya) との対比で理解されるべきものであることを中心に論じた。従って本稿は  
その「補遺」として位置付けられるものであるが、mahāvākya 自体については付  
加するところは殆どなく、むしろ前稿において単に以後の課題として指摘するに  
留めた「浄化文」(śodhakavākya) に関する考察に主眼がおかれている。

## I.

*Pañcadaśī* (PD) の第五章 (Mahāvākyaviveka) に対する Rāmakṛṣṇa (14C<sup>3)</sup> の注  
釈中に、筆者が理解するヴェーダーンタ学派の mahāvākya についての恰好の記  
述があるので、先ずはそれを出発点にしよう。

(i) mumukṣor mokṣasādhanabrahmātmaikatvāvagatisiddhaye prasiddhānām  
caturṇām mahāvākyānām arthaṃ krameṇa nirūpayan paramakṛpālur ācārya  
ādau tāvat 'aitareyāraṇyaka' gate 'prajñānaṃ brahma' iti mahāvākye 'prajñāna'-

śabdasyārtham āha—……(V, PD, p. 145, ll. 4-6)

(1) 解脱を望める者にとって、解脱を成就する梵我一如の了知を成就するために、周知の四つの大文章の意味を順を追って説示しつつ、最高の慈悲を持てる師は、最初に先ず『アイタレーヤーラニヤカ』に存する *prajñānaṃ brahma* という大文章における、*prajñāna* という語の意味を述べる。……<sup>4)</sup>

(ii) ……‘yena vā paśyati’ ity-ādeḥ ‘sarvāṇy evaitāni prajñānasya nāmadheyāni’ ityantasyāvāntaravākyasamdarbhasyārthaḥ saṃkṣipyā darśitaḥ // evaṃ prajñāna-śabdasyārtham abhidhāya ‘brahma’ śabdasyārtham āha—……(V, PD, p. 146, ll. 2-4)

(2) *yena vā paśyati* に始まり、*sarvāṇy evaitāni prajñānasya nāmadheyāni* に終る従属文の集まりの意味が、簡潔に示された。このように、*prajñāna* という語の意味を述べた後に、*brahma* という語の意味を述べる。……

(iii) ……‘eṣa brahmaiṣa indraḥ’ ity-ādeḥ ‘prajñā pratiṣṭhā’ ityantasyāvāntaravākyasyārthaḥ saṃkṣipyā darśitaḥ / itthaṃ padārtham abhidhāya vākyārtham āha—……(V, PD, p. 146, ll. 9-11)

(3) *eṣa brahmaiṣa indraḥ* に始まり、*prajñā pratiṣṭhā* に終る従属文の意味が、簡潔に示された。このように、単語の意味を述べた後に、文章の意味を述べる。

ミーマーンサー学派にとって *mahāvākya* とは、同一の目的に従事する複数の文章の集まり (*vākyasamdarbha*, etc.) であり、それらは長大な単一の文章 (*ekavākyatā*) と見なし得る。だが、その長大な文章を構成する個々の文章は各々役割が異なっており、そのためそれら複数の文章は主要な文章と従属文に分類される<sup>5)</sup>。主要な文章とは、この場合のヴェーダーンタ学派にとっては、解脱を望める者にとっての梵我一如<sup>6)</sup> の知をもたらす文章であり、従属文とは、主要な文章を構成する個々の単語の意味を闡明するためのものである。この場合、主要な文章が、*prajñānaṃ brahma* であり、従属文が、*yena vā paśyati, sarvāṇy evaitāni prajñānasya nāmadheyāni, eṣa brahmaiṣa indraḥ, prajñā pratiṣṭhā* 等<sup>7)</sup>である。だが、ここで特に注意すべきは、必ずしも長大とは言い難いこの主要な文章である *prajñānaṃ brahma* が *mahāvākya* と呼ばれていることである。この点が、ヴェーダーンタ学派の用語法のミーマーンサー学派のそれとの際立った差異であるとも言える。それは、偏にヴェーダーンタ学派の、長大な文章を構成する主要な文章の特異な性格<sup>8)</sup> によるのである。ヴェーダーンタ学派の主要な文章は、見掛けは短小ではあるが、それを構成する単語のうちに数多くの従属文を包含しているものと考え得る<sup>9)</sup>。この意味で、ヴェーダーンタ学派の場合も *mahāvākya*

は、ミーマーンサー学派と同様「長大な文章」と解し得るのであり、実際的にはむしろ概ねその末尾 (anta) に位置する「主要な文章」と解すればことたりる。現在でもなお見掛けることがある「偉大な文章」的理解<sup>10)</sup>が、こうした mahāvākya という語の背景の無視に基づくものであると言えるであろう。

Rāmākṣṣṇa は周知の mahāvākya として四つを列挙している。即ち、上に見た *Rgveda* 所属の AitareyaUp の prajñānam brahma, *Yajurveda* 所属の Bṛhad-āraṇyakaUp の ahaṃ brahmāsmi, *Sāmaveda* 所属の ChāndogyaUp の tat tvam asi, *Atharvaveda* 所属の MāṇḍūkyaUp の ayam ātmā brahma である<sup>11)</sup>。こうして見てくると、ヴェーダーンタ学派にとって mahāvākya と呼び得る主要な文章はまだまだいくらかでも挙げることができそうであり、事実 Colonel G. A. Jacob のコメントよりは、mahāvākya として、十一種、ないし十二種を列挙する文献が存在することが知れる<sup>12)</sup>。その中に avāntaravākya と明記されることがある satyaṃ jñānam anantaṃ brahma や vijñānam ānandaṃ brahma 等までもが含まれている事情についても筆者は前稿において簡単に検討した。以下にはこれらの諸点を踏まえた上で、その satyaṃ jñānam anantaṃ brahma や vijñānam ānandaṃ brahma 等に関わりのある śodhakavākya という術語について検討を加えよう。

## II.

問題の所在を明確にするためにも、先ずは Rāmānuja (11-12C) の *Vedārthasamgraha* (VS) の重要なテキスト・翻訳の出版<sup>13)</sup>等によって、Rāmānuja 研究に多大な貢献をなした J. A. B. van Buitenen の論述に注目したい。

(イ) ……and of the ‘mahāvākya’ satyaṃ jñānam anantaṃ brahma :……<sup>14)</sup>

(ロ) ……for the so-called mahāvākyas, which set forth the sole reality of the absolute non-qualified brahman, Rāmānuja uses the term śodhakavākyas, which I have not been able to trace to an advaita source<sup>15)</sup>.

(イ)(ロ)から、satyaṃ jñānam anantaṃ brahma は mahāvākya であり、Rāmānuja が mahāvākya という語の代わりに śodhakavākya という術語を用いている、との Buitenen の見解が明らかとなる。この二点は、Rāmānuja が VS 中で mahāvākya という術語を用いていないこと、そして、satyaṃ jñānam anantaṃ brahma を śodhakavākya と呼んでいることを知るならば、単純に並記され得る

ようなものではない。「satyaṃ jñānam anantaṃ brahma はいわゆる mahāvākya である。Rāmānuja は satyaṃ jñānam anantaṃ brahma を śodhakavākya と呼んでいる。従って Rāmānuja は mahāvākya のかわりに śodhakavākya という術語を用いている」との Buitenen の思考過程を推量することが出来るのである。だが、果たして Buitenen のように考えてよいものだろうか。筆者の疑問は Buitenen が採用した「satyaṃ jñānam anantaṃ brahma はいわゆる mahāvākya である」との前提に向けられている。前節でも触れた通り、この前提は今日自明なことがらではないのであり、前稿でも指摘したように第一義的にはむしろ極めて疑わしいものと考えべきであろう。この疑問に答えるためには、mahāvākya が如何なる意味を持つ術語であるかの検証を、個々の学匠の著作に即して周到に行なう必要がある。仮りにそれが、Buitenen の言うように充分根拠のあることであり、上の論述が妥当なものであるとしても、今度は śodhakavākya という術語がどういう意味であるかという問いかけをクリアしなければなるまい。Buitenen は、それには確定的ではないものの、次のように答えている。

(v) It is plausible that it has been borrowed from the terminology of a *milieu* which used the term *śuddhabrahman* to describe the absolutely real non-qualified brahman,……16)

以下には、Rāmānuja 自身の著作における śodhakavākya の用例<sup>17)</sup>を見てみよう。

(iv) etac chodhakāni prakaraṇāntaragatavākyaṅy api satyaṃ jñānam anantaṃ brahma, niṣkalaṃ niṣkriyaṃ, nirguṇaṃ, vijñānam ānandaṃ ityādini sarva-viśeṣapratyanīkaikākāratāṃ bodhayanti / (VS, pp. 77, ll. 9-11)

(4) そして satyaṃ jñānam anantaṃ brahma, niṣkalaṃ niṣkriyaṃ nirguṇaṃ, vijñānam ānandaṃ 等の、他の部分に存する諸の浄化する文章も、一切の特性に対峙する一相性を覚知させるのである。

(v) śodhakavākyaṅy api niravadyaṃ sarvakalyāṇaguṇākaraṃ paraṃ brahma bodhayanti / (VS, p. 84, l. 11)

(5) 諸の浄化文も、無欠にして、一切の美德の鉱床である、最高のブラフマンを覚知させるのである。

(vi) śodhakeṣv api satyaṃ jñānam anantaṃ brahma, ānando brahmetyādiṣu vākyaṣu sāmānādhikaraṇavyutpattisiddhānekaguṇaviśiṣṭaikārthāḥ abodhanam a-viruddham iti sarvaguṇaviśiṣṭaṃ brahmābhidhīyata iti pūrvam evoktam / (VS, p. 93, ll. 3-5)

(6) satyaṃ jñānam anantaṃ brahma, ānando brahma 等の諸の浄化する文章において、同格関係に基づく意味により成立する多くの徳性によって限定された一なる意味対象の覚知があることは矛盾しない、従って一切の徳性により限定されたブラフマンが表示される、と、まさしく先に、言われた。

(vii) “satyaṃ jñānam anantaṃ brahma”, “vijñānam ānandam” ity-ādi-śodhakavākyaḥ vāseyanirviśeṣasvarūpabrahmātmaikatvavijñānaṃ ca……(SrBh, i, p. 82, l. 8 -p. 83, l. 1)

(7) また, satyaṃ jñānam anantaṃ brahma, vijñānam ānandam 等の〔諸の〕浄化文によって帰結さるべき無特性のブラフマンとアートマンとの同一性の知が……

(viii) śodhakavākyaṇy api saviśeṣam eva brahma pratipādayantīty uktam // tat tvam asi ādi-vākyaṣu sāmānādhikaraṇyaṃ na nirviśeṣavastvaikyaparam; ……(SrBh, i, p. 53, ll. 2-4)

(8) 諸の浄化文もまた、有特性に他ならぬブラフマンを了知させる、と述べられた。tat tvam asi 等の文章における同格関係は、無特性の實在との同一性を目的とするものではない。……

(ix) ‘satyaṃ jñānam anantaṃ brahma’ iti lakṣaṇavākyaṃ api tata evāpārthakam syāt / (SrBh, ii, p. 250, ll. 5-6)

(9) satyaṃ jñānam anantaṃ brahma という規定文も、それゆえにこそ、無意味なものとなるであろう。

以上の如き Rāmānuja の VS, *Śribhāṣya* (SrBh) における用例からは、Rāmānuja が, satyaṃ jñānam anantaṃ brahma, vijñānam ānandam 等を確かに śodhakavākya と呼んでいることがわかる。だが今日普通に mahāvākya の代表として引かれる tat tvam asi ないし ahaṃ brahmāsmi 等<sup>18)</sup>を, śodhakavākya と呼ぶことはないのである。さらに, satyaṃ jñānam anantaṃ brahma と tat tvam asi を同類の文章として列挙することすらないという事実は何を意味するのだろうか。また, 筆者の管見する限り, Rāmānuja は mahāvākya という術語を用いていないようである。そうであるならば, (ix) に注目した上で, Buitenen は(ロ)と同様「Rāmānuja は mahāvākya のかわりに lakṣaṇavākya という術語を用いている」と言うことも出来たのである。この lakṣaṇavākya が, Śaṅkara (8C) さえもが satyaṃ jñānam anantaṃ brahma を指して用いた由緒ある術語であることは周知のことである<sup>19)</sup>。mahāvākya という術語を用いていないらしい Rāmānuja の著作から satyaṃ jñānam anantaṃ brahma を mahāvākya と呼ぶことの適否を判断することは出来ないとしても, Rāmānuja が, satyaṃ jñānam

anantaṃ brahma, vijñānam ānandam 等と tat tvam asi 等の文章の役割をはっきりと区別していたらしいことは、どうか推定できるように思われる。しかも前者を Rāmānuja の著作の外にはあまり見出し難い śodhakavākya という術語で呼び、特に satyaṃ jñānam anantaṃ brahma を Śaṅkara 同様 lakṣaṇavākya と呼んでいるのである。こうした事実は何を意味しているのだろうか。当然ながら、Rāmānuja 自身は、śodhakavākya という術語の意味を説明していないのである。

Rāmānuja の作品に対する注釈者や後続する学匠達の著作に tat tvam asi を śodhakavākya と呼んでいる用例を見出すことは出来ない。(vii) を注釈して Sudarśnasūri (14C 以前) は以下のように言う。

(x) ādiśabdenāsthūlam ity-ādi gr̥hyate / evaṃ brahmaṇo nirviśeṣatve śodhakavākyaṇy udāhṛtāni / (SP, SrBh, i, p. 82, l. 32-p. 83, l. 8)

(10) 「等」(ādi) という語によって、asthūlam 等〔の文章〕が意味されている。このように、ブラフマンの無特性に関する、諸の浄化文が例示されている。

ここで、satyaṃ jñānam anantaṃ brahma, vijñānam ānandam 以外の śodhakavākya の例として揚げられている asthūlam というのは、Rāmānuja 自身によって次のように列挙されるもののうちにある asthūlam anaṇv abahv asvam adīrgham という文章であろう。

(xi) etad uktaṃ bhavati—“asthūlam anaṇv abahv asvam adīrgham”, “satyaṃ jñānam anantaṃ brahma”, “nirguṇam”, “nirañjanam” ity-ādi-vākyaṇi nirastāsamastaviśeṣa-kūṭastha-nityacaitanyaṃ brahmeti pratipādayanti; …… (SrBh, i, p. 87, ll. 3-4)

(11) 次のことが言われたことになる。asthūlam anaṇv abahv asvam adīrgham, satyaṃ jñānam anantaṃ brahma, nirguṇam, nirañjanam 等の諸の文章が、ブラフマンが、一切の特性のない、確固として、恒常なる純粹精神であると、了知させるのである。……

また、(viii) を注釈して Sudarśnasūri は以下のように言う。

(xii) śodhakavākyaṇy sāmānādhikaraṇyam atadvyāvṛttimukhena vastvaikyaparam; tat tvam asy-ādiṣu jīvaḥ brahmaṇo sāmānādhikaraṇyam anvayamukhenopalakṣitavastvaikyaparam; ……(SP, SrBh, i, p. 53, ll. 14-15)

(12) 諸の浄化文における同格関係は、それならざるものの排除によって、実在との同一性 (or 実在の単一性) を目的とする。tat tvam asi 等における命我とブラフマンに関する同格関係は、随順によって、指示された実在との同一性 (or 実在の単一性) を目的とする。……

これよりは、先述の如く、Rāmānuja が問題の śodhakavākya と tat tvam asi 等の文章を明確に区別し、対比的に取扱っていたことが一属明瞭となる。「Rāmānuja は mahāvākya のかわりに śodhakavākya という術語を用いている」との Buitenen の問題の一般的叙述はやはり妥当性を欠くと言い得るのではないか。筆者の「ヴェーダーンタ学派の mahāvākya」理解に立つならば、Buitenen の説明は決して受け入れ難いものであり、それは mahāvākya に対する彼の厳密な姿勢の欠如を反映したものと言えよう。Buitenen の論述中に見られる mahāvākya に冠しての so called は、その論述が satyaṃ jñānam anantaṃ brahman 等を tat tvam asi 等と共に、mahāvākya として列挙する文献の存在を伝える Jacob の記述を無批判的に受け入れた結果であることを示しているように思われるのである。

以下には、Rāmānuja の用例で知られる śodhakavākya という術語が一体如何なる意味を担っているかという点に絞って考察を加えたい。それに当っては Rāmānuja に対する注釈ではないものの、しかも Rāmānuja のような確たる術語としての体裁を取っているとは断じ難いものの、以下の如き śodhakavākya の用例を窺うに及くはない。

(xiii) ……tvampadārthaśodhakavākyaiḥ śuddhatayā ’vagatasya jīvasya……(NR, p. 7, l. 20)

(13) ……諸の tvam という単語の意味を浄化する文章によって、浄なるものとして了知された、命我が、……

(xiv) padārthaniścayo hi vākyārthanirṇayakāraṇam / na ca brahma padārtho gavādipadārthavat mātāntareṇa nirṇetum śakyate / atas tatpadārthapariśodhakāni ’ekam eva’ ity-ādy-avāntaravākyāni satyajñānānandātma niṣprapañcaṃ brahma pratipādayanti santi mahāvākyaena saṅgacchanta ity arthaḥ / jīvo ’pi ’yo ’yaṃ vijñānamayaḥ’ ity-ādi-tvampadārthaśodhakāvāntaravākyaiḥ kartrādiprapañcarahitaprakāśānandatayā pratipadyata ity āha……(BhP, PPV, p. 380, ll. 10-15)

(14) 単語の意味の決定は、実に、文章の意味の決定の因である。また brahman という単語の意味は、go 等の単語の意味のように、他の認識手段によって決定することができるということはない。これ故に、tad という単語の意味を浄化する、ekam eva 等の諸の従属文が、真実にして、知であり、歓喜であり、無戲論なるブラフマンを了知させた上で、大文章と結びつく、という意味である。命我もまた、yo’ yaṃ vijñānamayaḥ 等の、tvam という単語の意味を浄化する諸の従属文によって、行為主体等の戲論を欠き・照にして歓喜なるものとして、了知される、と言う。……

(xv) padārthapratipattipūrvakatvād vākyaṅrthapratipatter ādāv adhyāropāpavādābhyām avāntaravākyaḥvaṣṭambhena padārthaṃ pariśodhyedānīṃ mahāvākyaṅrthaṃ nirūpayitum upakramate……(VSāraT, VSāra, p. 123, ll. 8-9)

(15) 文章の意味の了知は、単語の意味の了知を前提としているが故に、付託と排除〔の方法〕により、従属文に依拠して、単語の意味を浄化した後に、今度は大文章の意味を説示せんとするのである。

このうち ‘ekam eva’ とは ekam evādvitīyam として知られているものであるが、以上の記述をさらに以下の記述<sup>20)</sup>と結びつけたならば、如何であろうか。

(xvi) nanu dvididhaṃ vedāntavākyaṃ—ekam padārthaniṣṭhaṃ yathā “satyaṃ jñānam anantaṃ brahma” ity-ādi tatpadārthaparam, “yo ’yaṃ vijñānamayaḥ” ity-ādi tvam padārthaparam; aparam aikyarūpavākyaṅrthaniṣṭhaṃ yathā “tat tvam asi” ity-ādi; dvayam apy akhaṇḍārthaniṣṭhaṃ / (SK, p. 71, ll. 18-21)

(16) ウパニシャッドの文章には二種類あるのではないか。一つは、tat という単語の意味を目的とする satyaṃ jñānam anantaṃ brahma 等や tvam という単語の意味を目的とする yo ’yaṃ vijñānamayaḥ 等のように、単語の意味に従事するもの、もう一つは、tat tvam asi 等のように、同一性という形をとる文章の意味に従事するものである。両者ともに、不可分な意味に従事するものである。

これらはまた次の用例に呼応するものである。

(xvii) anekeṣāṃ padānāṃ lakṣaṇādīdvāreṇa ekarasavṛttitāyām udāharaṇam āha / tatra dvididhā vākyaḥvṛttiḥ, ekā brahmātmanor ekatvaviṣayā, aparā satyajñānādīlakṣaṇabrahmaviṣayā / (PPV, p. 709, ll. 1-3)

(17) 複数の諸の単語が、規定等を媒介として、一味に機能することに関しての、实例を述べる。そのうち、文章の機能には二種類ある。一つはブラフマンとアートマンの同一性に関わるもの、もう一つは、「真実」、「知」等の規定をもつブラフマンに関わるものである。

さらに、これは Śaṅkara の次の記述を承けたものと言えよう。

(xviii) dvirūpā hi vedāntavākyaṅnāṃ pravṛttiḥ — kva cit paramātma svarūpanirūpaṇaparā, kva cid vijñānātmanaḥ paramātmaikatvopadeśaparā / (BSSBh, p. 246, ll. 4-5)

(18) ウパニシャッドの文章の機能には、二種類ある。ある場合には、最高我の本性の説示を目的とし、ある場合には、識我の、最高我との同一性の教示を目的とする。

以上の用例によって、筆者の言わんとしていることはもはや明瞭であろう。冒頭で記したように、筆者は前稿において、mahāvākya とは単にヴェーダーンタ学派にとって重要なウパニシャッドの文章を意味しているのではなく、即ち「偉



大な文章」という意味での「大文章」などではなく、avāntaravākya との対比の下で捉えられねばならぬ長大な文章（←主要な文章）として初めて意義を持つということを、Śaṅkara 派の文献に即して論じた。またそれは、前節で見た Rāmā-kṛṣṇa の解説でも明らかに見てとれた筈である。今、そうした流れの中に Rāmānuja の独自とも言える śodhakavākya という術語を位置付けるならば、それは、Buitenen の言う mahāvākya の代わりに用いられた、というようなものではなく、むしろ mahāvākya の知を得るために奉仕する、avāntaravākya の別称と見做すべきものであったように思われるのである。そして、その術語中の śodhaka が担っている意味は、avāntaravākya の具体的な機能を表わすと見るべきであったのである。つまり、それは avāntaravākya が mahāvākya (主要な文章) を構成する単語の意味を浄化する機能を意味しているのである。梵我一如という語で知られている個我のブラフマンとの同一性の知を得るための前提となる個々の単語の意味を浄化する機能である<sup>21)</sup>。その意味に解して初めて、Rāmānuja の用語は有意味なものとなるのであり、それはまた、Śaṅkara によって採用された lakṣaṇavākya との呼称に相応するものと言える。(ix) の用例からも明らかな通り、Rāmānuja によってもその語は用いられている。そのことは、satyaṃ jñānam anantaṃ brahma が śodhakavākya と呼ばれた事実と矛盾するものではない。一つのモノが、様々な局面を持つことは不思議でもなんでもなく、従ってそれに応じて様々な名称で呼ばれることがあるということは充分納得のいくことである<sup>22)</sup>。

以上の考察により、ヴェーダーンタ学派によって後代屢々用いられる mahāvākya という術語と、特に Rāmānuja よって採用された śodhakavākya という術語に対する一応の展望が得られたように思われる。この展望は個々の学匠の個々の著作に限定しての個別の考察によってなお具さに検証する必要があるが、もとよりそれは小論の及ぶところではない。 (1986. 12. 15)

#### 《略号》

BhP: Bhāvaprakāśikā of Nṛsiṃhāśrama → PP

BSSBh: Brahmasūtra-Śaṅkarabhāṣya (Delhi etc., 1980)

NR: Nyāyarakṣamaṇi of Āpṇyadīkṣita (SADG 1, Sikendrabad, 1971)

PD: Pañcadaśī of Vidyāraṇya (SSG 2, 1984)

PP: Pañcapādikā of Padmapāda (MGOS 155, 1958)

PPV: Pañcapādikāvivarana of Prakāśātman → PP

PUp: The Principal Upaniṣads by S. Radhakrishnan (4th Ed., London & New York, 1974)

SK: Śrutyantakalpavallī of Puruṣottamadāsa (ChSS 65, 1927)

SP: Śrutaprakāśikā of Suclarśanasūri → SrBh

SrBh: Śrībhāṣya of Rāmānuja (UVG, 2vols, 1967)

Up: Upaniṣad → PUp

V: Vyākhyā of Rāmakṛṣṇa → PD

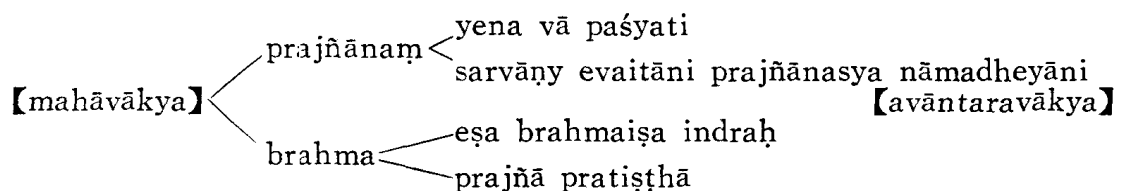
VS: Vedārthasaṃgraha of Rāmānuja by J. A. B. van Buitenen (DCMS 16, 1956)

VSāra: Vedāntasāra ed. by Colonel G. A. Jacob (4th Ed., Bombay, 1925)

VSāraT: Vedāntasāratīkā of Rāmatīrtha → VSāra

### 《註記》

- 1) 本稿中言及される Up の文章の出典箇所のみ示は特別の場合を除き全て略す。
- 2) 拙稿「ヴェーダーンタ学派と「大文章」」『高崎直道博士還暦記念 印度学仏教学論集』(仮題・未刊)。
- 3) 本稿において便宜上付した学匠の年代は, K. H. Potter, ed., *The Encyclopedia of Indian Philosophies*, Vol. I (Delhi, 1970) と前田専学『ヴェーダーンタの哲学』(京都 1980) に基づく。
- 4) 本稿中に引用したサンスクリット原文に対して便宜的に付した拙訳は, 訳全体としてはあくまでも暫定的なものであることを断っておきたい。
- 5) 前掲拙稿参照。
- 6) 梵我一如に関しては, 拙稿「梵我一如—ジャンカラによる—(1)」『駒大仏教学部論集』17号(昭 61. 10) pp. 585-555 参照。
- 7) この (i) (ii) (iii) 中に登場する mahāvākya と avāntaravākya は, AitareyaUp III-1-1~3, PUp, p. 523 のものであり, yena vā paśyati に始まり, prajñānam brahma に終る, 一連のものと言える。注 22) 参照。
- 8) それを一口で言うならば, 本稿では便宜的に「同格関係」と訳される sāmānādhikarāṇya ということである。それにも区別が考えられていることは, (xii) より明らかである。ミーマーンサー学派においては, vidhi (主要) と arthavāda (従属) の対比の上に, mahāvākya が想定されていることを忘れてはなるまい。
- 9) AitareyaUp の場合。



- 10) 極最近の例としては、島岩「『バーマティー』I, 1, 1-4 和訳 (IX)」SAMBHĀṢĀ 8 (1986. 11) pp. 49-103, 註 521 (p. 92) 中に「……ブラフマンとの同一性を教える聖典の偉大な文章 (大文章) として不二一元論学派で極めて重要視されており、……」とある。
- 11) Cf. V, PD, pp. 145-150. なお注 2) の拙稿の注 36), 37) を参照。
- 12) VSāra, pp. 155-156 の Jacob の註記を参照。
- 13) VS.
- 14) Ibid., p. 58, ll. 6-7.
- 15) Ibid., p. 58, ll. 27-29. この Buitenen の記述については前田専学博士により既に紹介がなされている (前田前掲書 p. 199 の注 8)。
- 16) VS, p. 58, ll. 29-32. Cf, op. cit., p. 189, n. 68.
- 17) Buitenen が SrBh の用例を踏まえているかについては不明である。なお Buitenen は śodhaka-vākya に ‘purificatory’ statements (VS, p. 58), purifying statements (op. cit., 189), purifying śrutis (op. cit., p. 198) という訳語を与えている。(viii) の仏訳を与える Olivier Lacombe, *La doctrine morale et métaphysique de Rāmanuja* (Paris, 1938), p. 22, ll. 6-10 には, ces déclarations purifiantes とある。ただし, この箇所の Lacombe の解釈は承服し難い。
- 18) そのような用例はいくらでも引けるように思われるが, ここではそれを割愛する。
- 19) lakṣaṇavākya については M. Biardeau, “La définition dans la pensée indienne”, JA (1957), pp. 371-384, “Quelques réflexions sur l’apophatisme de Śaṅkara”, IIJ, III-2 (1959), pp. 81-101 等の優れた研究がある。ただし Biardeau もまた satyam jñānam anantaṁ brahma を mahāvākya と見做す伝統に従っているように見える。Cf. Biardeau (1957), p. 377, Biardeau (1959), p. 83.
- 20) また同書 (SK) 中には以下の如き興味深い用例もある。mahāvākyaśyāvāntaravākyaena gatārthatvaṁ ca na syāt tatpadārthabodhakena ‘satyaṁ jñānam’ ity-ādinā tvampadārthaśodhakena “yo ’yaṁ vijñānamayaḥ” ity-ādinā cāvāntaravākyaena lakṣaṇayā śuddhacaitanyabodhanāt / (SK, p. 80, ll. 7-10)
- 21) śodhakavākya という術語は見られないにしても, 同種の文脈で śodhana, pariśodhana, śodhita, pariśodhita 等の用例が極めて屢々見出される点は重要であろう。注 2) の拙稿の注 39) を参照。
- 22) (xvi) の用例より顕著となる事例に即して, 今少し検討したい。この場合, tat tvam asi (M) が mahāvākya であり, satyaṁ jñānam anantaṁ brahma (A<sub>1</sub>) と yo ’yaṁ vijñānam (A<sub>2</sub>) が avāntaravākya である。M を構成する tat と tvam という単語の意味を浄化するものが, それぞれ A<sub>1</sub>, A<sub>2</sub> である。M は ChāndogyaUp

中のもの、 $A_1$  が TaittiriyaUp 中のもの、 $A_2$  が BṛhadāraṇyakaUp 中のものとして知られている。 $A_1$  の持つ機能によって *tat* という単語の意味が śodhita (or pariśodhita) され、 $A_2$  の持つ機能によって *tvam* という単語の意味が śodhita され、その結果 M の意味が了知される。その意味で、 $A_1$ 、 $A_2$  の持つ機能が、śodhaka-, śodhana, pariśodhaka 等と呼ばれる。従って  $A_1$ 、 $A_2$  は共に śodhakavākya と呼び得る。また  $A_1$  は時に lakṣaṇavākya と呼ばれることがあるが、それは  $A_1$  が brahman の lakṣaṇa を与えるからである。これを (xviii) と較べると、 $A_1$  は、Śāṅkara によっての paramātma-svarūpa-nirūpaṇa-para- に当たり、lakṣaṇa- は -svarūpa-nirūpaṇa- と等置出来るであろう。そうすると、M は vijñānātmanaḥ paramātmaikatvopadeśa-para- に当たる。Śāṅkara には、例えば …… ‘*tat tvam asi*’ …… ‘*ahaṃ brahmāsmi*’ …… ‘*ayam ātmā brahma*’ …… *ity-evam-ādīnāṃ vākyānāṃ* …… brahmātmaika- …… (BSSBh, p. 77, 1. 5-p. 78, 1. 1) があり、Rāmakṛṣṇa によって四 mahāvākya と列挙されたうちの、三つまでを一括りにしている。Śāṅkara によって、その -ādīnāṃ vākyānāṃ のうちに、 $A_1$  が考慮されていなかったことは明白であろう。

また、この場合の M と A の取合せを、前節で見た AitareyaUp の例と較べると、興味深いのではないか。後者があくまでも同一 Up 中の一連の vākya で、長大な mahāvākya が構成されていたのに対して、前者には、 $A_1$ 、 $A_2$  というそれぞれ異なった Up 中の vākya が入っており、この不首尾に与することを潔しとしない学匠もあった筈である。(xiv) では、*tat* という単語の意味を浄化するものとして、 $A_1$  ではなく M と同一 Up 中の *ekam evādvitīyam* を用いて説明している。何れにしても、ヴェーダーンタ学派における mahāvākya, avāntaravākya, ないし śodhakavākya という術語の導入が、解脱を希求する者に対する解説・教示に便ならしむるためであったということは想像に難くない。